1/200の西本さんとの出会い

西本さんと初めて出会ったのは今から6年前、2009年4月の大阪青年会議所（大阪JC）の入会式でした。40歳までの経済人の集まりである青年会議所（以下JC）は、卒業が40歳、入会が当時は37歳までと決められていたので、ボクも西本さんも最終年度ギリギリでの入会でした。同じ2009年には若い方で25歳から37歳までの総勢200名が大阪JCに入会しました。そしてその入会式で最初に200人での名刺交換タイムがあったんです。制限時間は10分ほどで誰と名刺交換をしても良いと言うルールでした。その時点でボクは最初に名刺交換をする人を決めていました。それが西本さんだったんです。何故かというと一人目立ってオシャレだったのでこの人と友達になりたい！そんな単純な理由でした（笑）。そしてボクは真っ先に西本さんの所に行ったのですが、何と西本さんも真っ先にボクの所に名刺交換に来たんです！何故かと理由と聞いてみると何と全く同じ理由でした（笑）。その名刺交換の短い時間の中では、どこで服を買っているのか？とかそんなお話をしたことを鮮明に覚えています。

株式会社タグボート

設立年月日／ 平成20年7月1日
事　業　所／【大阪オフィス】〒541-0047 大阪府大阪市中央区淡路町2丁目5番8号　船場ビルディング416号室
【東京オフィス】〒106-0032 東京都港区六本木7丁目5番11号　カサグランデミワ508号室
【上海オフィス】中国上海市虹口区臨平路133弄16号37楼
業務内容／ 不動産再生のトータルプロデュース,エネルギーコスト削減コンサルティング,再生用不動産の買取、販売業務

ボクが女性だったら完全に惚れてますわ（笑）

JCの入会式で仲良くなりそこからゴハンに行ったり、イルサルトの入っている船場ビルディングも西本さんに紹介をして頂きました。西本さんのすごいなーと思うのは、たいがいどんなことでも知っていることと自分の軸や価値観を明確に持っている所。自分を冷静に客観視することが出来るので、自分のすべきこと出来ることを明確に出来るので迷いが無い。その上ワインのことも料理のことも車のこともすごく詳しい、でもウンチクを自慢気に語ったりもしないので嫌みが全くない。しかも仕草が全て自然なのでカッコイイ、ボクの知り合いでモテオトコベスト3には間違いなく入りますね（笑）。

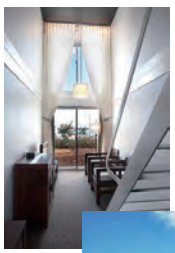
今年の1月のイタリア出張には西本さんも一緒に行ったのですが、英語が堪能な上に料理や具材についても詳しいのでそのお店で美味しいメニューを聞きだしたり、アイフォンをこれでもかというくらいに使いこなし、ローカルの人間しか乗らないだろうと思われるバスまでもスムーズに乗り継いで全くストレスの無い一週間のイタリア出張を過ごすことが出来ました。ボクが女性だったら完全に惚れてますわ（笑）。西本さんの仕事ぶりを実際に見たことはありません、でも西本さんのお話を聞いていて感じるのは〝自分の得意分野にフォーカスして深掘りをすることで個人でもこんなに大きな仕事が出来る様になるのか？？〟ってことなんです。

そこで西本さんに改めて色々なお話を聞いてみました！

現在の仕事内容を教えて下さい！

不動産を使った投資商品を作っています。投資といっても、ただ利益を出すだけではなく、デザイン、環境、社会貢献など様々なニーズに対応できる商品を作ることに注力しています。例えば、海上輸送で使うコンテナを使って、インドネシアの大学生達が暮らす寮を作るプロジェクトを進めています。いまインドネシアでは、環境汚染やエネルギー不足が大きな社会問題となっています。元々「エコロジー」という概念がまだ定着していないインドネシアで、この考えを根付かせるには大変な時間を要します。そこで、海運用のコンテナを再利用し、断熱性能が高く、省エネ設備を搭載したモジュール住宅を作り、キャンパス内に設置しようという企画をたてました。

彼らが、この廃コンテナを再利用したエコハウスに住み、4年間のキャンパスライフを過ごすことで、自然と環境に対する意識が醸成されるという内容です。さらに、コンテナを購入してもらうのは、企業経営者。決算で出た余剰金を使って、償却資産かつ社会貢献の両方の意味合いでこの商品を購入してもうおうと思っています。会社の利益で社会貢献をしながら、決算対策をし、翌年からは収益も生み出すという内容です。



インドネシアに建設予定の学生寮のイメージ

何故今の仕事をする様になったのですか？

一言で言えば人が困っている問題を、自分のアイデアで解決するビジネスをしたかったからなんです。私がいまやっている仕事には様々な要素が数多く含まれています。それは、サラリーマンとして企業に勤めていた経験から得られた知識もあれば、そうでないものも沢山あります。実は専門的な知識というものは、私たちの仕事では決定的な要素ではありません。正直なところ、私よりも専門的な知識を持つ人は世間には五万といるわけで、データ量でその人たちに勝つことは容易ではありません。どちらかといえば、それ以外の知識やアイデアの方が、より重要であると考えています。「人々が困っている問題」というのは、つまるところ「既存の知識」や「既成概念」では解決が出来ないから問題化しているのです。↖